Meiji University Library
署名は検証されていません。
電子署名者：Meiji University Library
DN: cn=Meiji University Library, c=JP
日付：2003.11.18 11:01:01 +09'00'

各課報告

図書館庶務課

図書館庶務課業務は，図書館資料の購入・受入，除籍，調査・統計業務，予算管理，各種委員会事務局業務，図書館システムの運営・開発等に加え，図書館事務部業務内の他課・事務室に属さない事柄である。課内各係は，庶務(経理を含む)係，発注・受入係，システム係に分かれている。

図書館庶務課として，また図書館としても 2000 年度最大のトピックは，新・中央図書館のオープンと私立大学図書館協会会長校任務 2 年目の業務であった。特に，新・中央図書館のオープンまでの図書館庶務課の業務は多岐にわたった。関連委員会の委員としてまた事務局業務，施設設備・システム関連の打ち合わせ，備品等の納入，図書等の移転，電子図書館機能の立ち上げ，オープンセレモニー関連業務など開館にこぎつけるまで様々な業務に忙殺された。

一方，私立大学図書館協会会長校としての業務は，会長である三枝館長を側面から支えながら，事務局として東西各部会，各種委員会活動を支え，また会長校としてある面でのリーダーシップを発揮した。専修大学で行われた総会・研究大会の成功のために全国 420 大学図書館の代表として館員から支援を得ながら業務を遂行した。

ところで，図書館庶務課員の多くは館内各種委員会の事務局を担っているが，2000 年度は，新・中央図書館開館準備のためにサービス推進委員会などの各種委員会活動を支えるための時間が取れなかったと言う反省点がある。

発注・受入業務は，本年度から「書店連携システム」と称して，資料納入業者を特定して，発注データの入力，資料の調達，整理，装備までを業者に委託する方式を採用した。これは，資料の迅速提供と業務効率化を狙ったアウトソーシングである。本年度は，全館の開架和図書に限定してのものだった。年度下期からのスタートであり，当初は多少進捗がはかばかしくなかったが徐々に効果をあげてきた。次年度以降一層この傾向は大きくならざるを得ないだろう。

図書館システム関係業務としては，電子図書館機能開発，新・中央図書館へ配置する図書自動貸出機のシステム対応，マルチメディアコーナーのシステム設計，業務用・利用者用パソコン(141 台)のリプレースなどに忙殺された。また，懸案であったライブラリーカードの廃止(学生証・教職員証の利用)に伴う利用者データベースの整備，図書の OCR ラベルからバーコードラベルへの転換，書店連携システムの対応など，図書館業務の根幹にかかわる変更処理も今年度の業務であった。

課内業務全体から見ると，本年度は比較的大きな業務を行ってきたが，その分きめの細かな業務の点検などが疎かになったきらいがある。図書館庶務課が担う整備すべき事項はまだまだ多く残されているという認識を深くしている。

整理課

大学の事務職員削減方針と相俟って，図書館においてもその対策が迫られていた。特に，2000年3月開館予定の新図書館に相応の人員が必要となることが予想されるなか，その人員の捻出が急務とされていた。そのため，通常受入図書整理業務のアウトソーシングを数年前から計画し，検討を重ねた結果，2000年度導入が決定され，その予算も計上された。

アウトソーシングによる整理・装備処理を，2000年度は和書・一般開架図書に限定して実施した。書店業者 MARC を使用して選書・発注されたデータが，検収から整理・装備業務へと流れる書店連携システムは，2000年10月から稼動し，半年間で約4000冊の図書を処理した。また，生田図書館の「重要文化財修理工事報告書」や研究所事務室からの移管図書（洋書）の整理・装備もこのシステムによって行われた。2001年度からは，和書の対象資料を日本語図書全般に拡大するとともに，洋書においてもアウトソーシングする方針で検討を進めていた。しかし，それに対応するだけの業務委託費が予算化されなかったため，2001年度の洋書整理業務において，大幅な方針変更が余儀なくされている。

未遡及・未整理図書のデータ化では，神宮文庫，野田文庫を業務委託費によって整理を終えた。また，近代文学文庫の再編成に伴う再整理は，佐藤正彰氏寄贈資料を2000年1月に終えることができた。いっぽう江戸文藝文庫については，要員不足もあり完了することができなかった。なお，佐藤正彰氏寄贈資料のデータ整備はほぼ終了し，2001年度中の冊子体目録刊行の目処がついた。

新図書館開館に関連して，貴重書データの一部を短期間で再整理することが要請され，通常手にすることがなかった古書・漢籍資料を，和書担当者全員で取り組み，期限に間に合わせることができたことは望外の喜びであったといえる。

授業支援としては，司書課程・阪田教授の「図書館学総論」において，図書館所蔵の西洋古版本の展観，解題を洋書担当者が行い，学部間共通講座「図書館活用法」における図書館員の講義補助とともに，受講生から好評を博した。

1999年に行われた，図書館新システムへのデータ移行時に損なわれた目録データの修復業務および遡及データチェック業務については，庶務課システム担当者と数次にわたる打合せを重ね，その対策と方策を見出すことができた。2001年度から具体的作業を開始する。

閲覧課

新図書館への移転作業と開館準備に忙殺された一年であった。

準備作業は，1999年度に開架本へのバーコード貼付等が完了していたが，2000年度はまず，自動書庫移転図書6万冊のシール貼付，マイクロフィッシュの箱詰め，諸文庫の自動書庫への移転を行った。11月30日から12月4日まで東急通運に委託して，中

国関係図書，米国判例集等を第一次移転した。その後，マイクロ資料の移転，開架準備本の抜き取りなどを行い，2月7日から3月3日まで，同じく東急通運によって第二次の移転を完了した。移転数は，書庫内の組替えも含めて約 70 万冊に及んだ。移転後も書架整備などの作業が続いた。この間，専任職員，嘱託職員を問わず残業・早出体制で臨んだ。加えて文献情報課はもとより，図書館庶務課，整理課，和泉図書館，生田図書館から長期間の動員体制により援助していただいたことに感謝する次第である。

事前の移転により一部の図書に利用制限をせざるをえなくなった。また，入試明けから3月15日まで休館することもあり，利用者に理解を求めるべく，「新図書館ニュース」を再開して，移転作業の進捗状況や新図書館の概要を逐一報知した。また，休館前には，図書の貸出冊数を，学生は10冊まで，院生前期を30冊まで拡大して利用の便を図った。

12月からは，運用準備委員会を設置，パートごとにサービス体制について検討を行ったが，蔵書移転に追われて必ずしも詰めきれず，開館後に混乱を招いた点もあった。

以上が新図書館関係であるが，このほか，2000年度に開始した主要事項を以下に列記する。①校友への図書の館外貸出し，②シラバス本の網羅的収集（固定と簿外の2セット購入。簿外購入分をシラバス本コーナーに学部，教員別に配架。2001年度分については，和泉図書館と連携して各学部からシラバスのゲラの提供を得て収集を迅速化した），③休館・閉館時の図書返却ボックスの設置，④館外貸出図書延滞者への葉書による督促（データベースからの出力），⑤1F貸出カウンターからの入庫。

図書館自習室利用者からの不正入室や設備改善等のクレームが年間を通じて相当数寄せられた。不正入室には，休日，土曜の夜間等に巡回を強化して対処したが，設備，運用は如何ともしがたい。B地区再開発により2001年度には移転を余儀なくされることもあり，今後のあり方について大学を交えて，緊急かつ抜本的に見直す必要がある。

文献情報課

1984年5月に100周年記念図書館の開館に伴い，10月に「文献情報課」が発足し16年を経たが，新中央図書館の完成によって「総合サービス課」に統合されこの課は消滅することになった。

当課には，1986年以降のビジネス・経営分野を収録したBell&Howell社のCD-ROM版「BPO」が設置されているが，機器のトラブルと操作に難点とがあるものであった。昨年6月に同社のWeb版「Proquest」が駿河台地区に限定であるが導入され，1,550タイトルの全文閲覧が可能となり利用者サービスの面で大きく貢献したといえる。

さて昨年10月にSwetsnet－Navigatorの運用開始により，Eメールによる15,000タイトルの目次情報サービスが可能となり，生田地区では多数の方がEメールによるコンテンツサービスの提供を受けるようになった。これにより生田図書館における目次コピーという大変な作業の省力化が図られたが，駿河台地区では，このサービスを2001年度実施を目途としているところである。

最後に，新図書館への移転に関することであるが，昨年11月から，書庫内資料で新

図書館へ移転させるものを一箇所に集めるための書架移動・タトルテープ挿入の作業を開始した。この作業の実施に伴い，ILLの受付は実質不可能となり，3月末までILL加入の機関には謝絶せざるを得ない状況に至った。また本年1月には，当課からの複写・図書貸借の依頼ですら処理不能となり，やむなくこれも3月末まで受け付けを中止せざるを得なくなった。2月5日から3月15日まで移転及び開館準備のため休館することになったが，この間，利用者から強い苦情の申し出もなく推移できことは，利用者の多大な御理解を得ることができたものと深く感謝するとともに，あらためて御不便をおかけしたことに対してお詫びする次第である。

2000年度後期試験の終了を待って，2月8日に運送業者により新図書館への資料の搬出が実施され，その後，新図書館に配架された資料にカレント誌の組み込みや，B2書庫内資料の書架移動及びラベルの貼付等を他課の応援を得ずして順調に実施し，無事3月14日の新中央図書館オープンセレモニーの日を迎えることができ，16日には開館のはこびとなった。

和泉図書館事務室

2000年度，和泉図書館では，かねてよりの懸案であった次の諸点の整備を行った。

第1は，駿河台地区旧記念図書館から転用した書架を第2，第3開架閲覧室の古い書架と入れ替え，そして各書架に見出しを取りつけ，より利用しやすいものとした。

第2は，第2開架閲覧室の天井灯を増設し照度不足を解消し，より明るい閲覧室となったことである。

第3は，和泉図書館旧館書庫一層部分は換気が悪く黴が発生しやすい状況にあった。かって黴の発生にともないここに所蔵してあった大型本を急遽新館書庫に全冊移すという大掛かりな作業を行った苦い経験がある。この度旧館書庫一層に24時間フル稼働の除湿機3台を設置し，書庫としての機能を回復したことである。

第4は，図書館入口前に和泉庶務課の好意によりプランターを設置してもらい，四季折々の花を添えより入りやすい図書館を演出したことである。

次に，恒例となった図書館主催の講演会「著者と語る」を6月に和泉図書館2階閲覧室で開催した。第1回の井上ひさし氏，第2回の文学部助教授斎藤孝先生に続く2000年度は，政治経済学部教授の安藤元雄先生を講師にお迎えし，『本を読む人　読まない人』の演題でご講演いただいた。

さらに，和泉キャンパス所属の先生がたに図書館をより身近なものに感じてもらうことと図書館のホットなニュースを提供する目的で，教員向けに『和泉図書館だより』を発刊した。不定期ではあったが通巻11号まで発行した。次年度も引き続き発行する予定である。

2000年度より「教員による学習用図書選書委員会」が設置され，本格的に教員による学習用図書の選書が開始された。和泉図書館ではツールとして日販の出版情報を利用し，そのほか委員による推薦の方法で学習用図書を購入した。初年度としてはかなりの成果

があった。

最後にリバティーアカデミー公開講座及び図書館活用法に「近代文学文庫」所蔵の資料が活用され，且つ講師の一員として和泉図書館の課員梅田順一が講義にあたったことを付記する。

生田図書館事務室

施設・設備の改善，閉架本の全面開架を視野に入れた書庫整備，シラバス本の早期配架や閲覧室の環境整備といった，利用者への更なるサービス向上等を主要課題として業務を推進した。

施設・設備関係では，閲覧室・参考室・雑誌室の照明改善（照度アップ）が，図書館長，図書館事務部長のご努力と関係者各位のご協力により，2001年度予算の中でその改善工事が認められることになった。生田図書館における長年の要望事項であっただけに，特筆に価するものである。

2001年4月から中央図書館で実施している「閉架本の全面開架」は，書庫が入庫検索（ブラウジング）に耐えうるまでに整備されていることが必須条件である。残念ながら生田図書館の現状は適性を欠いており，実施には「抜本的な書庫整備」が必要であると言わざるをえないが，近い将来の全面開架に向けた第一歩として，2箇所に別置されていた2万2千冊の図書の同一場所への配架と，数千冊に及ぶ研究室からの引き上げ本の書庫への移転（現在も進行中）を行った。

シラバス本に対する学生諸君の関心は非常に高いものがある。授業開始時に当該年度のシラバス本を配架すべく，12月から1月にかけて理工・農両学部の授業担当教員（兼任教員を含む）全員に，「2001年度シラバス」掲載参考書の調査を実施した。その結果，配架時期では格段の改善をみることができたが，調査票の回収が非常に低調であり，回収方法の検討が新たな課題となった。

新・中央図書館の完成により，中央図書館と生田図書館の環境面の格差は更に拡大することになった。早期の生田図書館の改築（改修）が不可能な状況の中で実現可能な環境整備を進めるべく，中央図書館で不用になった「蛍光灯付4人用机」22脚を第3開架閲覧室へ搬入した。当該閲覧室の電気配線の関係から，蛍光灯が利用できない状態にあるが，利用者の反応は概ね良好である。

11月30日，理学視学委員による理工学部の実施視察が行われたが，生田図書館も関連施設として視察対象となり，その対応のための資料を作成することとなった。視察後の講評で図書館についての言及がなかったことは，図書館の現状を視学委員が容認したものと判断したい。